幼児集団におけるリーダーシップ機能に ついでの実験的研究*

実践女子大学 小林 さ え 子
斎 藤 美 智 子**

I 問 題

幼児の社会性の発達についての研究領域は、幼児期における社会化の問題や、集団形成の問題を含んでいる。これらのうち、後者に関するものを、実験的に明らかにしようとした試みの一つが本報告である。

歩行が自由になる2〜3才頃から、幼児があそび相手の同輩を求めることは一般に知られている。この同輩への歩みよりが積極的な集団化のはじまりである。しかし、集団とはいっても、相手はせいぜい1人である。かれらは身体的には群をなしていても、もののやりとりが少なく、会話とみえてもいわゆる「集団的独語」であることが多い。このような段階から、集団は発達していく。集団化の発達是一般に、a) 集団の形成されるシチュエーション(課題場面)の性質や数 b) 集団のサイズ c) 集団の機能と構造などによつてしることができる。幼児集団についてみるならば、(a) 自発的に形成される幼児集団のシチュエーションは、あそび1種類である。(b) 集団のサイズは、メンバーの数によつてあらわされるが、幼児期全般を通して、平均3〜4人である。(c) 集団機能の発達には、身体的群化——相互交渉——集団機能の発生という経路をとる。

リーダーシップ機能は、集団機能の総体であるといわれる。したがつて、リーダーシップ機能の発達をインデックスとして、集団形成の発達過程をみることができる。幼児集団のリーダーシップに関する従来の研究の大部分は、自由あそびの場面における観察を資料としている。たとえば「時間抽出法」により、幼児の行動を観察し、リーダーシップについて研究した M. Parten も、ナースリー・スクールの自由あそび中に、これを行つてゐる。わたくしたちは、自発的に形成された幼児集団

を、観察するという方法をとらないで、条件を統制した実験的事態において、リーダーシップ機能の発達を確かめることを企図した。

II 対象と方法

被験集団 東京都内の10幼稚園から、200名(うち、I. Q. 100〜110 児童100名、I. Q. 110〜120 児童100名、男女各半数)をえらび、50の被験集団を組織した。各集団のメンバーは、男女各2名の計4名である。年齢は4.0〜6.5才を5段階に分ける。したがつて、各年齢段階には、I. Q. 100〜110集団(ABCDE)5集団と、I. Q. 110〜120集団(A' B' C' D' E')5集団が属している。あらかじめ候補集団をつくり、積木あそびの共同作業をさせて、成員相互の間柄を確かめる。そしてとくにひどいケンカなどしない間柄のものを被験集団と決定した。

課題 「ぬり絵」2枚の共同作業をさせる。35cm平方の画用紙に、黒い輪郭だけの下絵が描かれている。下絵の構造には2種ある。(a)四等分図形 画用紙面を四等分する対角線がひかれ、4領域には各人に1対1の割になるように、花とバケツの同じ輪郭画が描いてある。(b)統一図形 真中に朝顔の輪郭画が一つだけ描いてある(図柄は下に示す)。なお、被験集団と課題の組み合わせを示すのが Table 1 である。

実験室 遊戯場からはなれた幼稚園の一室である。4名の被験者を机の一边にひとりずつ坐らせる。

教示 12色クレヨンをひとりに1箱ずつあたえ、「4人でできるだけきれいにぬつてごらんさい」という。

実験期間 昭和31年

記録および分析法 R. Lippitt が集団雰囲気の実験に用いた total behavior method (行動総計法)を多少変形したものである。つまり延100集団のぬり絵作業中にあらわれた、有意味的社会的言動の一切を3名の記録者が記録する。それをL型とF型とO型の3種類に分類する。それぞれの型に属せしめた内容はつぎのようなものである。

* An experimental study of leadership function in young children's groups.

** by Kobayashi, Saeko & Saito, Michiko (Jissen Women's University)

Table 1 被験集団と課題

年令・ 課題の構造 I. Q. 集団・性別			4.0~4.5		4.5~5.0		5.0~5.5		5.5~6.0		6.0~6.5	
			四等分 図形	統一 図形	四等分 図形	統一 図形	四等分 図形	統一 図形	四等分 図形	統一 図形	四等分 図形	統一 図形
100~110	A・B・ C・D・E	男	10人		10人		10人		10		10人	
		女	10		10		10		10		10	
110~120	A'・B'・ C'・D'・E'	男	10		10		10		10		10	
		女	10		10		10		10		10	

Table 2 実験集団にあらわれた社会的言動数(実数)

I. Q.	集 団	年令・ 課題の構造	4.0~4.5	4.5~5.0	5.0~5.5	5.5~6.0	6.0~6.5	合 計
			四等分 図形	統一 図形	四等分 図形	統一 図形	四等分 図形	
100~110	A. B. C. D. E.	四等分図形	51	73	76	76	97	373
		統一図形	56	69	80	116	116	437
110~120	A'. B'. C'. D'. E'.	四等分図形	55	68	86	74	111	394
		統一図形	66	56	90	110	143	465
100~120	{A. B. C. D. E. A'. B'. C'. D'. E'}	四等分図形	106	141	162	150	208	767
110~120	{A. B. C. D. E. A'. B'. C'. D'. E'}	統一図形	122	125	170	226	259	902
100~110	A. B. C. D. E.	四等分・統一	107	142	156	192	213	810
110~120	A'. B'. C'. D'. E'.	四等分・統一	121	124	176	184	254	859
100~110 110~120	A. B. C. D. E. A'. B'. C'. D'. E'.	四等分・統一	228	266	332	376	467	1669

L型 (リーダー型の言葉と動作)

- (a) 指示命令 (b) 提唱 (c) 許可をあたえる (d) 禁止
(e) 他人のものを許しを得ずにとる (f) 故意に仲間の注意を喚起する

F型 (フォロアー型の言葉と動作)

- (a) 自分のすべきことをたずねる (b) 自分のしたいことの許しを求める (c) 他の成員の言葉や動作に従う
(d) 自分が劣っていることを示す言動。

O型 (客観的な言葉と動作)

他のメンバーとの交渉の言動に、優位劣位を意味することがないもの

以上のほか、記録者は全体的印象をかきとめておく。

III 結 果

§1 社会的言動数

100実験集団中に、出現した社会的言動数を、「年令」「ぬり絵課題の構造」「集団成員のI. Q.」の要因別に表わしたのが Table 2である。これによればつぎの諸傾向がみられる。

(i) 総括していえば、社会的言動数は年令とともに、増加していく。「課題構造」別にみても、「成員のI. Q.」別にみても、総じてこの傾向がみられる。

(ii) 「課題構造」別にみると、「統一図形集団」の方が、「四等分図形集団」より、概して社会的言動数は(年令別にみて)多い。

(iii) 「成員のI. Q.」の異なる集団をくらべると、「110~120集団」の方が、「100~110集団」より、概して社会的言動数は(年令別にみて)多い。

§2 L型・F型・O型の社会的言動

100実験中に、出現した有意義的社会的言動のすべてをL型・F型・O型に分類した。そのうちL型・F型は、集団成層化(group stratification)を誘導する性質のものであり、O型はそれをもたないものである。この3種の言動を「年令」「作業課題の構造」「集団成員のI. Q.」の要因別にとらえ、L・F型の言動数とO型のそれとの比率を表わしたのが Table 3である。これからつぎのようなことがいえる。

Table 3 実験集団にあらわれたL型・F型・O型の社会的言動数(実数)およびL・Fと型言動とO型言動の比率(%)

I. Q.	集 団	年令・社会的言動の型 課題の構造	4.0~4.5才			4.5~5.0才			5.0~5.5才			5.5~6.0才			6.0~6.5才		
			L	F	O (%)	L	F	O	L	F	O	L	F	O	L	F	O
100~110	A. B. C E. D	四等分図形	10	8	33	21	6	46	17	8	51	15	7	54	29	3	65
			18 (35.3)		(64.7)	27 (37.0)		(63.0)	25 (32.9)		(67.1)	22 (28.9)		(71.1)	32 (33.0)		(67.0)
110~120	A'. B' C'. D' D'	統一図形	11	7	38	23	4	42	40	9	31	61	16	39	69	17	30
			18 (32.1)		(67.9)	27 (39.1)		(60.9)	49 (61.3)		(38.8)	77 (66.4)		(33.6)	86 (74.1)		(25.9)
110~120	A'. B' C'. D' D'	四等分図形	10	8	37	12	6	50	21	8	57	8	5	61	17	2	92
			18 (32.7)		(67.3)	18 (26.5)		(73.5)	29 (33.7)		(66.3)	13 (17.6)		(82.4)	19 (17.1)		(82.9)
100~110 110~120	A. B. C D. E A'. B' C'. D' E'	統一図形	15	5	46	24	14	18	41	22	27	65	25	20	92	29	22
			20 (30.3)		(69.7)	38 (67.9)		(32.1)	63 (70.0)		(30.0)	90 (81.8)		(18.2)	121 (84.6)		(15.4)
100~110 110~120	A. B. C D. E A'. B' C'. D' E'	四等分図形	20	16	70	33	12	96	38	16	108	23	12	115	46	5	157
			36 (34.0)		(66.0)	45 (31.9)		(68.1)	54 (33.3)		(66.7)	35 (23.3)		(76.7)	51 (24.5)		(75.5)
100~110 110~120	A. B. C D. E A'. B' C'. D' E'	統一図形	26	12	84	47	18	60	81	31	58	126	41	59	161	46	52
			38 (31.1)		(68.9)	65 (52.0)		(48.0)	112 (65.9)		(34.1)	167 (73.9)		(26.1)	207 (79.9)		(20.0)
100~110 110~120	A. B. C D. E A'. B' C'. D' E'	四等分・統一	21	15	71	44	10	88	57	17	82	76	23	93	98	20	95
			36 (33.6)		(66.4)	54 (38.0)		(62.0)	74 (47.4)		(52.6)	99 (51.6)		(48.4)	118 (55.4)		(44.6)
110~120	A'. B' C'. D' E'	四等分・統一	25	13	83	36	20	68	62	30	84	73	30	81	109	31	114
			38 (31.4)		(68.6)	56 (45.2)		(54.8)	92 (52.3)		(47.7)	103 (56.0)		(44.0)	140 (55.2)		(44.9)
100~110 110~120	A. B. C D. E. A' B'. C' D'. E'	四等分・統一	46	28	154	80	30	156	119	47	166	149	53	174	207	51	209
			74 (32.5)		(67.5)	110 (41.4)		(58.6)	166 (50.0)		(50.0)	202 (53.7)		(46.3)	258 (55.2)		(44.8)

(i) 全体的にいえば、L・F型言動がO型言動に対する比率は、年令とともに増加していく傾向がみられる。しかし、細部を点検すると、このような外見をもたらしたものは、多く「課題の要因」であることがわかる。

(ii) 「課題構造」別にみると、四等分図形集団と統一図形集団では、事情はまったく逆な関係にたっている。

「四等分図形」の集団では、L・F型言動は、一義的にはないが、概していえば、年令の上昇につれて、やや減少しO型言動が増加する傾向がある。

「統一図形」の集団ではこれに反し、L・F型言動は、一義的に年令の上昇に並行して増加する。一方、O型言動は、年令とともに減少する。

(iii) 「成員のI. Q.」別にみると、(ii)にのべた傾向を、「100~110集団」と「110~120集団」は、ともにもっている。ただし、L・F型言動が激増する年令段階には相違がある。「100~110集団」では、「統一図形」において「5.0~5.5才」の段階に激増がみられ、「110~120集団」においては「統一図形」のばあい「4.5~5.0才」の段階で激増がみられた。なお、「100~110集団」では「四等分図形」でのL・F型言動の年令的增加は不定的で、「110~120集団」のばあいほど明瞭でない。

(iv) 以上の諸事実によって、「四等分図形集団」では年令によるL・F型言動の増加は、不定的であるが、「統一図形集団」では、それがきわめて著しいことがわかった。

ここでは「統一図形」課題のばあいだけをとって、集団成員のI. Q. 別にL・F型言動数の増加を、趨勢直線によって表現してみた。Fig. 1 がそれである。

趨勢直線の公式は $y=ax+b$ であるから、このばあいにはつぎの式のような関係になる。

$$a = \frac{\sum i y_i}{\sum i^2} \quad b = \frac{\sum y_i}{n}$$

$$i : (4.0-4.5) \dots -2 \quad (4.5-5.0) \dots -1$$

$$(5.0-5.5) \dots 0 \quad (5.5-6.0) \dots +1 \quad (6.0-6.5) \dots +2$$

$$y_i = L \cdot F\% \quad n = 5$$

aは直線の勾配を示し、bはy軸との交点を示す。

「I. Q. 100~110集団」の趨勢直線としては、 $y=11.13x+54.6$ 、「I. Q. 110~120集団」の趨勢直線としては、 $y=12.25x+66.92$ を得る。平均値 54.6 と 66.92 で I. Q. の高い集団の方が高値がい。直線の勾配としては、両種の集団間の差は僅少であり、ほとんど同じ位と考える方が妥当であろう。

Fig. 1 統一図形課題にあらわれたL・F型の
社会的言動数増加の趨勢直線

なお、このほかに、点の分布に関し生長曲線も描いてみたが、趨勢直線とほとんど一致するという結果になった。これらによれば、L・F型言動は年令に比例的に増加していることが明瞭である。

§3 L型の社会的言動とリーダーの発生

「統一図形」課題におけるL・F型言動は、I. Q. が普通の集団では、5.0~5.5才の年令段階を境とし、I. Q. の高い集団では、4.5~5.0才の年令段階を境として急増し、以後も年令とともに漸増する事実を上に見た。しかしL・F型言動の増加は、ただちにリーダーの出現を意味しない。つまり出現したL・F型が、きまつた成員から発せられているわけではないからである。そこで各集団4成員が各課題作業中に示した、具体的な言動の型と数をI. Q. 別に表わしたのが、Table 4, 5である。

集団中、特定の成員のL型言動が、他の成員たちより著しく多く、同時にF型言動が、他のものより少ないばあいをもつて、リーダーとみなす。また、リーダーにつぐそのような型の行動をするものがあれば、サブ・リーダーとみなすことにする。ただしその際には、観察者の印象記録を手がかりとして判定する。

すると、「統一図形集団」において、I. Q. 100~110の

課題図形
四等分図形

統一図形

ばあい、5.5~6.0才年令段階以外において、4名のリーダーと3名のサブ・リーダーがみられた。また「I. Q. 110~120集団」では、5.0~5.5才年令段階以後に、「統一図形」課題で6名のリーダーと4名のサブ・リーダーがみられた。「四等分図形」でも、リーダー的な行動をするものが1名あつたが、彼は性格的に異常なものがあつた。リーダーとみてよいか否かは問題である。幼児のリーダーおよびサブ・リーダーになるものとして、性差はみられなかった。

IV 要 約

ぬり絵の共同作業を課した、幼児の実験的集団にみられたリーダーシップ機能

の発達について、つぎのような諸事象が明らかになった。

(i) 集団の発達の水準は、リーダーシップ機能の発達をもつてはかることができる。それは集団活動におけるエネルギーの節約と、よりよい集団目標達成のために、集団におこるはたらきだからである。本実験によればリーダーシップ機能は、L・F型言動の出現——特定リーダー発生(成層化)という段階をたどつて発達する。

(ii) 上にのべた事実を規定する要因の一として、課題の要因があげられる。「四等分図形」の構造は、L・F型言動の生起および、リーダー発生を抑制するはたらきをもつ。一方、「統一図形」はその両者を促進させる力をもつ。「統一図形」は社会的言動一般を「四等分図形」より多くひき起す。

(iii) リーダーシップ機能の発達は、集団成員の年令的要因に関係をもつ。普通程度の知能をもつ4.0~4.5才児の集団では、集団機能発達的水準はきわめて低いが、その水準は生活年令とともに高まっていく。

(iv) 集団機能発達的水準は、生活年令に関係がある。しかし等しい生活年令であつても、I. Q. の要因によつてそれぞれ異なる。本実験においては、I. Q. 100~110集団とI. Q. 110~120集団の間に、L・F型行動の

Table 4 I. Q. 100~110の実験集団中にあらわれたリーダー(—)とサブリーダー(....) (M=成員)

年 令	社 言 動 の 型	A、						B						C						D						E								
		四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形					
		M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M			
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	
4.0〜4.5	L	0	0	0	2	1	0	1	2	2	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	
	F	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	
	O	1	0	1	4	2	1	1	4	2	1	1	1	2	2	1	2	2	0	3	2	3	1	2	2	0	1	2	2	4	2	2	3	3
4.5〜5.0	L	2	0	0	3	2	1	0	3	1	0	1	3	0	1	1	2	1	1	0	1	1	0	1	0	0	1	1	0	1	2	0	1	2
	F	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	
	O	2	1	4	5	3	1	2	3	2	2	3	0	3	3	2	3	0	3	0	1	2	1	2	2	2	3	1	1	3	2	2	4	
5.0〜5.5	L	0	1	0	1	1	1	0	2	1	3	3	0	3	3	3	5	0	1	0	1	1	1	0	1	2	1	1	0	4	2	2	2	0
	F	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	0	0	1	1	0	2	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1	1	0	1
	O	3	1	1	2	0	0	1	1	2	1	8	5	3	3	3	3	2	1	1	2	1	0	0	1	0	3	4	2	1	2	2	3	5
5.5〜6.0	L	0	1	2	0	1	0	2	4	2	1	1	1	8	2	3	3	0	1	1	0	1	2	1	0	1	1	1	1	2	7	12	2	0
	F	0	1	0	1	0	0	1	0	0	2	0	0	0	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	
	O	2	3	2	1	1	2	1	1	8	8	2	1	4	4	5	2	1	1	0	2	0	1	0	1	3	5	5	4	1	2	3	1	2
6.0〜6.5	L	1	1	0	0	2	1	3	3	3	1	5	5	3	1	7	10	1	1	0	2	4	5	2	1	1	0	1	0	2	3	2	1	2
	F	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	2	0	0
	O	2	0	3	5	1	0	1	1	1	6	9	9	2	1	5	1	3	4	1	1	3	2	1	2	2	2	1	1	1	0	0	4	4

Table 5 I. Q. 110~120の実験集団中にあらわれたリーダー(—)とサブリーダー(....)

年 令	社 言 動 の 型	A'						B'						C'						D'						E'															
		四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形			四 等 分 形			統一図形												
		M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M										
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4								
4.0〜4.5	L	0	1	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	2	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	1	0	3	0	0	5	1	0	0	2	0	0	0	3	0	0	
	F	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1		
	O	0	1	2	2	1	0	1	2	3	0	1	2	3	1	2	2	1	1	1	1	1	1	0	2	6	4	0	3	9	5	2	2	4	2	2	4	3	3	2	
4.5〜5.0	L	1	1	2	0	0	1	3	0	0	2	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	1	2	0	0	3	2	4	1	0	1	0	1	2	2	1	0
	F	0	0	1	0	1	0	1	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	2	0	0	0	1	1	2	1	0	0	0	2	2	0	1	0	0	0	0	0	1		
	O	4	1	3	1	0	0	2	0	1	9	2	2	0	1	0	1	3	2	1	1	3	0	1	0	4	4	5	2	2	0	5	0	2	1	1	1	1	0	1	
5.0〜5.5	L	0	0	0	10	0	0	1	12	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	2	0	0	1	0	2	0	2	0	5	0	12	0	1	1	2	1	3	0	2
	F	0	3	3	0	3	2	5	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0	1	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1	1		
	O	2	2	5	13	0	0	0	1	4	2	3	1	0	1	1	1	2	1	1	0	1	3	2	1	1	3	2	3	1	4	3	5	2	2	5	2	1	2	1	1
5.5〜6.0	L	0	1	0	0	0	3	2	0	1	1	0	0	1	2	2	0	1	0	1	0	3	1	3	1	0	1	1	0	6	10	8	6	0	0	0	1	2	3	4	8
	F	0	0	1	1	2	0	3	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	3	1	1	1	0	0	3	1	2	3	0	0	0	1	0	0	2	
	O	3	1	6	2	0	0	2	0	1	4	5	5	0	0	1	1	2	2	2	4	1	1	0	1	4	3	2	8	2	2	2	2	3	1	2	2	0	1	1	2
6.0〜6.5	L	1	0	1	0	1	0	4	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	1	1	0	0	7	12	0	1	0	1	1	1	0	13	15	0	0	4	5	12	1	9	13
	F	0	0	0	0	3	1	1	2	0	2	0	0	1	3	1	0	0	0	0	0	2	5	0	2	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	2	1	0	1	
	O	2	2	3	2	0	1	0	0	2	7	1	8	1	1	0	0	3	2	3	3	0	1	2	1	2	4	3	4	4	1	0	6	12	5	8	14	3	2	2	

生起とリーダー発生の時期において、それぞれ6カ月の差があり、後者の方が早期に出現した。つまり、I. Q. 条件や課題事態の条件をのぞいて、生活年齢だけで、幼児の集団化発達を論ずることはできないのである。

文 献

- (1) Parten, M. : Leadership among Pre-school Children. *J. adnorm. soc. psychol.* 27, 1933,
- (2) Lippitt, R. : An Experimental Study of Authoritarian and Democratic Group Atmospheres. *Univ. Iowa. Stud. Child Well.* 16, No 3. 1939
- (3) Cartwright, D. and A. Zander (ed) : *Group Dynamics*. 1953. N. Y., Row Peterson.
- (4) 小林さえ子・斎藤美智子 : 集団の成層構造に関する一研究——精神薄弱児集団の場合(抄録) 応用心理学論文集 1955.

(1958年1月23日受稿)

ABSTRACTS

AN EXPERIMENTAL STUDY OF LEADERSHIP FUNCTION IN YOUNG CHILDREN'S GROUPS

By Kobayashi, Saeko and Saito, Michiko

Jissen Women's University

I The present study aims at making clear how the leadership function of young children's groups develops, through co-operative situations created experimentally.

II Subjects and methods : Out of 10 kindergartens in Tokyo, 200 children (100 boys and 100 girls) were selected to organize 50 groups (25 of which were composed of members with I. Q. 100~110, while the rest were composed of ones with I. Q. 110~120).

Each group had 4 members (2 boys and 2 girls), whose ages ranged 4.0~6.5 years. Five grades were set out by age, and each grade contained 10 groups.

Tasks were to crayon two kind of figures with contour only, each of them is drawn on a big white paper : the one is of a single object (Fig. S.), the other is of four same objects (Fig. F.).

III The results summarized :

1) The structure of "Fig. F." inhibits the development of the group, i. e. behaviors of L-type (leader-type) and F-type (follower-type) induced group stratification are few. There appeared many parallel working without leader, on the every stage of age.

2) The structure of "Fig. S." stimulates the interactions between members and development of group functions. Behaviors of the L-F types increase with age and there were the appearance of leaders.

In "I. Q. 100~110 groups", many L-F behaviors appear on the stage of 5.0~5.5 years. And the leaders emerge later than on the stage of 5.5~6.0 years. On the other hand, in "I. Q. 110~120 groups", both the emergences of L-F behaviors and leaders were six months earlier.

ON THE AGGRESSIVE BEHAVIORS OF CHILDREN

Yoneyama, Hisae

Nihon University

The purpose of this study is primarily to observe the aggressive behaviors of children, secondly to analyse the various factors resulting it and to

determine the relationship between these factors and the behaviors, and thirdly to take clinical considerations into each case. The subjects were sixty two